

# 漢詩人大沼枕山の生涯

安田吉人

明治二十四年十月一日、大沼枕山は東京上野池之端花園町の自宅において、七十四歳の生涯を閉じた。幕末から明治初期、江戸漢詩壇の中心にあり続けた老詩人の死であった。枕山の訃報に接した人々は「詩道、此より衰えんや」(『明治詩話』<sup>(注1)</sup>)。以下、引用は適宜句読点を補い、書き下し文等に改めた)と嘆き、漢詩文芸の衰えを予感した。

枕山の全生涯を詳細に紹介したものに、永井荷風著『下谷叢話』(大正十五年刊。同十二年刊『下谷のはなし』初出)と今関天彭著「大沼枕山」(『書苑』第三卷十一号。昭和十四年刊)がある。しかし、荷風の書は明治期が手薄であること、天彭の論は枕山没後に流布した誤伝が混入することなどのうらみがないわけではない。私は、枕山門の高弟嵩古香が住職を務めていた、埼玉県東松山市了善寺(現住職は古香の孫海雄氏)に伝存する書簡・自筆詩稿・藏書などを閲する機会をいただいた。また、枕山の末裔大沼和子・千早氏のご厚意により、かつて荷風が『下谷叢話』執筆の際に参考にした資料を拜見し、お話を承った。私はこれらを基礎資料に、新たに枕山の年譜を作成した。本稿では紙面の都合上年譜の全文を掲載することはできないので、幕末と明治の二年分を例に取り、そこから垣間見ることのできる枕山の生涯について言及しようと思う。

〔年譜Ⅰ〕

●嘉永二年(一八四九)己酉 三三歳

一月 一日 「元日」詩作。(『枕山詩鈔』)

※『枕山詩鈔』は、三卷三冊。安政六年七月刊行の枕山の個人詩集で、天保六年〜嘉永二年作の詩を収録。以後、続刊された二編・三編により、慶応三年までの枕山の動向を知ることができる。

二日 上野不忍池の紫茄亭で飲酒。(『枕山詩鈔』)

一四日 枕山著『枕山詩鈔七言絶句』成。試燈節(一月一四日)、自序。

※同書は、一卷一冊。天保七年〜一四年作の七言絶句を集めた枕山の個人詩集で、『枕山詩鈔』と重出する詩もある。

二月 七日 朝川善庵没、六九歳。枕山は少壮の頃、二州橋畔の住まいに善庵を訪ね、詩稿を激賞されたことを、後年回顧している。(『雲飄餘影』間中雲飄著・明治一五年刊)

※善庵は、名、鼎。字、五鼎。号、学古塾。江戸の漢詩人。山本北山門。大窪詩仏・梁川星巖と親交を持ち、広く温雅な人柄が敬愛された。

春 「近日、余、詩格少変。偶得一絶」詩作。作風の変化を自覚する。(『枕山詩鈔』・『枕山隨筆』)

※『枕山隨筆』は、慶応大学斯道文庫蔵。枕山自筆写本五冊。外題に隨筆とあるが、内容は天保一三・一四年、弘化元・三・四年、嘉永元・二・四・五年作の詩稿。合綴の折に年代に混乱が見られるが、枕山自身の推敲や符号が見られる貴重書。

春 「野服」・「春游示人」詩作。国事に背を向ける。(『枕山詩鈔』)

春 「寄題、忍公湖亭」詩作。(『枕山隨筆』)

春 宇津木龍臺・小野湖山・生方鼎斎・阪野耕雨・松平某、女流詩人の原采蘋・篠田雲鳳と、犬塚子乾の寓館の宴に遊ぶ。(阪野耕雨著・行斎編『月波楼遺稿』明治二二年刊。)

※耕雨は、名、福。字、大来。号、月波楼。下総国飯沼の富農で、詩にも優れ、下総を訪れる文人の多くが寄留した。

春 小野湖山・鷺津毅堂・生方鼎斎・阪野耕雨・犬塚子乾・松平某・原采蘋・篠田雲鳳と、宇津木龍臺の彦根藩の寓館に遊び、席上課題「帰雁」詩作。(『月波楼遺稿』・『枕山隨筆』)

※龍臺は、名、泰交。字、子同。号、五清。

三月 五日 遠山雲如著『雲如山人集』の題詞を撰。(『枕山詩鈔』)

※雲如は、名、澹。字、子発。号、裕斎・春平。江戸の漢詩人。大窪詩仏・菊池五山のもとに出入りし神童の誉れ高く、のち玉池吟社に参加して重きをなした。『雲如山人集』は、二巻二冊。この月頃刊行。上巻に七言律詩、下巻に七言絶句を収録した、雲如の個人詩集。

春 菊池五山の詩会にて「春郊獵婦」詩作。〔『枕山詩鈔』〕

春 僧梅癡・小原鉄心・大槻磐溪・小野湖山・阪野耕雨・菊池秋峯と、秋元甲山の宴に遊ぶ。〔『月波楼遺稿』〕

※甲山は、名、坤。字、厚載。奥州白河の医員。江戸住。

四月 二〇日 江戸の鷺津毅堂、名古屋の森春濤に書簡。春濤から依頼された詩稿の評を枕山にも依頼したと報ずる。また、春濤の近作の送付を求め、『名家詩録後編』に入集させたいが、出版が叶わぬ時は『湖山楼詩屏風』に編入する予定であると述べる。（佐藤寛著『春濤先生逸事談』明治三二年成）

夏 河野鏡兜の播州に帰るを送る。〔『枕山詩鈔』〕

※鏡兜は、名、維熊。字、絢天。通称、夢吉。播磨の人。林田藩儒。

夏 犬塚子乾の彦根に帰るを送る。〔『枕山詩鈔』〕

五月 六日 雨中、小野湖山・鷺津毅堂・阪野耕雨・石川艇斎・某葩卿と、隅田川にて舟遊び。〔『月波楼遺稿』〕

五月 両国の花火を詠む。〔『枕山詩鈔』〕

七月 一四日 河村蘭圃の訃報に接する。〔『枕山詩鈔』・『近世名家絶句』〕

※蘭圃は、名、重。字、楚芳。江戸の人。

秋 小原鉄心邸の梅花に寄題。〔『枕山詩鈔』〕

※鉄心は、名、寛。字、栗卿。大垣藩戸田氏正の家老。

田村考叔の訃報に接する。〔『枕山詩鈔』〕

※考叔は、別号、恥堂。中山氏。北千住駅の官吏。

八月 一三日 平塚梅花と、僧松影の山房にて月を待ち、駱賓王の詩を分韻して詩作。（平塚梅花著『秋錦山房詩鈔』明治一五年刊）

※梅花は、名、真宝。字、楽善。江戸の人で、のち横浜住。

一五日 小野湖山と観月。竹内雲濤遅れて至る。この日約束していた、遠山雲如・石川艇斎・鷺津毅堂・鱸松塘・秋場桂園は欠

席。〔枕山詩鈔〕・〔枕山隨筆〕・小野湖山著『火後憶得詩』

※湖山は、近江の人。梁川星巖門。毅堂は、名、監。字、文郁。尾張の人。毅堂の祖父松陰と枕山の父竹溪は兄弟。九月二〇日前 阪野耕雨・僧顯真、それぞれ来訪。飲酒。枕山は、先に酔って伏し、二人の客は深夜まで飲酒。〔月波樓遺稿〕

※顯真は、名、真。字、覺義。号、梅花道人。江戸の人。

二九日 阪野耕雨と、遠山雲如宅を訪問。小野湖山・鷺津毅堂・鈴木石城・川村竹坡・宮崎青谷と同席。〔月波樓遺稿〕

九月 平塚梅花・矢田部岐山と、隅田川畔の某荘に遊ぶ。〔秋錦山房詩鈔〕

秋 女流詩人高橋玉蕉著『玉蕉百絶』成。枕山の題詞収録。

※同書は、一卷一冊。玉蕉は、名、瀧。字、水龍。仙台の人。

冬 僧古岳の求めに応じ「画牡丹」詩作。〔枕山詩鈔〕

※古岳は、字、慈歎。号、幽真。高野山の僧。琴僧と称され、琴を背負って諸国を旅し、また和歌を得意とした。(中根香亭著『香亭雅談』明治一九年刊)

冬 小野湖山編『乍浦集』刊。枕山の序詞収録。

※この年、一二月二五日、幕府より諸大名に沿岸防備の命が出された。枕山は、宇津木龍臺が海防の任に着くため相州へ赴くのを送る湖山の詩に対する評にて、西書に通じる湖山は海防の思いが強いと述べる。〔火後憶得詩〕

一二月 「歳晚感懷」詩作。〔枕山詩鈔〕

一五日 小野湖山著『湖山樓詩稿』成。枕山の評収録。

この年 上野下谷御徒町三枚橋南畔に土地を購入。翌年一月、新居落成。考詩閣と称す。〔同人集』初編)

※天保六年に名古屋から帰府した枕山は、下谷泉橋通り(父没後に大沼家を継いだ叔父次郎右衛門宅か)や梁川星巖宅に寄寓していたらしい。天保十一年より芝増上寺の学頭僧梅癡の坊に寄寓。弘化元年一二月に梅癡の世話で上野下谷に新居を構えた。〔江戸現在広益諸家人名録初編〕・『華山全集』・『枕山詩鈔』・『枕山詩鈔七言絶句』・鱸松塘著『松塘詩鈔』・『湖山樓詩稿』

## 一 枕山の交遊

枕山が漢詩人を志したのは、その生い立ちと無関係ではない。枕山の父竹溪が、名古屋の儒家鷺津家から江戸の大沼家に入った事情や、枕山が大沼家を継がなかった理由については、荷風の推察した範囲を出る新資料を私は持たない。数種の俗説は伝わるが、ここでは、枕山自らが父について語った言葉だけを挙げる。「吾父、故有りて異姓を冒す。官遊千里、江東に客す。青雲の宿志を遂げずと雖も、騷壇に幟を建て、衆の宗ぶ所となる」(『薄游唸草』序)。騷壇は芸文界のこと。つまり、枕山は父の生涯を、武士として立身は叶わなかったが、詩人として成功を収めたと考えていたのである。天保八年、芝薬王寺に父の墓を展じた時、「惟 詩癖を同じくする有り。家声を誓う、墜とさずと。」(『枕山詩鈔』)と誓った枕山の決意を見ると、何か現実的な家の事情があったとしても、「翁弱冠より、家幕府の小吏にして人後にあるを嫌ひ、家職を挙て侘に譲り、自一家門を開く」(『国会』二六四号。明治二十四年刊)が、枕山にとって、家を継がなかった理由の一つであったことは認められよう。

枕山は十歳で父と死別、十五歳から三年間を名古屋の鷺津家で過ごす。七歳年少の鷺津毅堂とともに学んだ記憶を「吾、嘗て西遊して君の舎に寓す。吾、未だ弱冠、君、猶ほ童のごとし。一堂に対床し、事を講習す。燈火旦に達すること度三冬」(『薄游唸草』序)と記す。またこの時「余また祖父幽林翁の業を継ぐ。是三世たり」(『薪憂小稿』評)との自覚を持った。少年期から剣術より読書を愛し、家庭内で学問に親しんでいた枕山が、鷺津家で得たものは少なくなかった。

漢詩人としての志を胸に、枕山が江戸に戻ったのは、天保六年十八歳の時である。「年譜Ⅰ」の、詩稿を携えて朝川善庵を訪ねたのもこの頃であろう。『枕山詩鈔』などによれば、菊池五山・梁川星巖・大窪詩仏・館柳湾・鹽田隨斎ら詩壇の先輩を積極的に訪ねた。中でも、枕山の漢詩に寄せる情熱を認め、後援を惜しまなかったのが、江戸詩壇の雄五山と星巖で、「五山・星巖。二老。最も余の才を憐む」(『古香詩稿』評。明治二十年)と記している。五山は、『五山堂詩話』

を出版し、江戸詩壇の大御所と目されていた人である。枕山は五山(注七)に師事し、その詩会は毎月欠かさず、たとえ大風雨に雨衣が滲み滴っても出席した(『古香詩稿』評。明治十二年)と回想している。星巖の詩社玉池吟社にも、当時多くの俊英が集っていた。星巖は枕山の才を高く評価し、出世作『房山集』の刊行に当たっては、開刻記念の会を枕山のために催している。渡辺華山宛星巖書簡(天保九年二月十七日付)の一節には、

一 此人は大沼竹溪の男にて、当時小生塾に寓居仕候。詩は先竹溪よりも勝れ居候。実に当今の才子に御座候。此度房山集開刻仕候に付、本月廿二日発会候。当人を差上候間、何卒餘人ならば差上不申候得共、実に少年ながら俊逸の才に御座候に付、何卒玉成を期し候に付、先生へも奉希候。

とある。二十一歳にして、父を凌ぐと評す書面は、五山・隨齋が口を揃えて将来を嘱望した『房山集』の序に通じる。枕山の詩壇登場は、以上のように先輩らの後援を得た、非常に恵まれたものであった。

枕山の後援者としてもう一人忘れられないのが、僧梅癡(年譜I)である。梅癡は、初め深川本誓寺、後増上寺学頭。清淡な人柄と豊富な学問で文人と交流し、後年、下総結城の弘経寺住持を経て、飯沼の弘経寺住持となった人。荷風が「清絶言ふべからざる思に打たれた」と評する枕山の「酒癡歌」(天保十四年作)は、梅癡の傍らで風雅に浸る姿が描かれている。毎夕飲酒を許された枕山は、燈下詩作にふける梅癡の傍らで沈酣し、梅癡が詩を質しても的外れな答えをするばかりだが、広い心を以て許されると詠む。ここでは、星巖が梅癡のもとに寄寓する枕山を詠んだ「大沼子寿寒夜の吟に和す」(天保十二年作)の一節を挙げる。「長源 真得たり 読書の地。地霊 寧くんぞ知らんや成仏の心を。好く新篇を把って梨棗に上らせなば。高僧は分與す 布施の金。」(『星巖戊集』)。物心両面にわたる梅癡の庇護は、まさしく「方外の情深、父親に比す」(安政五年作「梅癡上人を哭す」というものであった)。

次に枕山と才を磨きあった詩友を挙げる。(年譜I)に見るように、枕山の雅遊の記録は少なくない。下谷に程近い上野東叡山と隅田川は四季を通じ親しんだ遊興の地である。また、知友の多い房州を筆頭に、その海路にあたる相州の杉

田梅園や金沢、藩校の教授に招かれた古河や梅癡ゆかりの結城、書画会で訪れる上州・武州など、近国への小旅行も頻繁だった。例えば『枕山詩鈔』から嘉永五年の動きを追うと、夏に熊谷・本荘、神奈川・巖鼻、六月に高崎・伊香保・榛名山、七月に房州、九月に八王子、十一月に結城を訪ねている。精力的な行動に驚かされるが、それでも、鱸松塘や遠山雲如ら多年諸国を放浪した当時の詩人たちと比較すると、行動範囲は狭い。あるいは、健康に不安があったことに起因するのか、枕山の旅は、安息できる地に長逗留する傾向が見られる。

房州においては、鱸松塘の東洋漁舎が安息の地であった。松塘は、姓名は鈴木元邦、字は彦之。温暖な気候と雄大な自然、「君往き我来たり 断絶無し。天涯 只覚ゆ 比隣の如くと。」(天保十四年作)という松塘との親交はもちろん、家族を含めた歓待が枕山を喜ばせた。枕山は松塘の詩風を、小野湖山の「雄偉」、嶺田楓江の「麗典」に対し、「清秀」を以て比肩すると讃えている(『松塘小稿』題詞)。比較した二人も、「余、平生文・酒を以て相親善する者は嶺田士徳・横山懐之の数子のみ」(『枕山随筆』天保十三年)と語った親友である。湖山は、姓名は小野(横山とも)長愿、字は懐之。一時期絶交したこともあったが、交流は晩年まで続いた。後に湖山自ら「余と枕老と、青年の貧困相似る也。故に其の交情、亦、太だ相親しき也。(中略)当時、交わる所の諸子、存する者幾人か。而して、枕老と余と猶ほ能く相對酌し、相唱酬す。何等宿縁」(『昌文新編』三号)と語ったのが実情を伝えているよう。

こうした詩友たちとの交遊の一例として、弘化三年、枕山二十九歳の時の観月の様子を取り上げよう。夕方、激しい雨にもかかわらず湖山・毅堂・長谷川昆溪が、昨年来の約束通り集まってきた。隅田川に赴むかんとすると、菊池秋峯が偶然やってきたのでこれも誘う。隅田川に舟を買って酒と詩を楽しみ、その風雅を「袁宏泊渚・李郭同舟」の故事に譬える。舟を繋ぎ街を歩くほどに、時刻は二更を告げる。枕山は友人たちが帰ろうとするのを引き止め、無理に吉原の酒家へと誘う。深夜、帰宅してみると……

簾を巻き 戸を推して 天を仰ぎて立つ

崩雲 脱壞し 氷盤を露す

坐客 驚呼し 喜こびて舞はんと欲す

咄嗟に酒を辨かち 更に重看す

茅屋 陋と雖も かえって楽しかるべし

吟坐 最も宜し 秋 澹泊

我酔って眠らんと欲し 君且つ臥す

蒲団に相對して 殊に悪しからず

須臾にして 満床 鼾声大なり

覚えず 西巖 斜月の落つるを

〔枕山詩鈔〕

この夜の遊びは印象深かったらしく、湖山・毅堂も詩を残している。枕山と詩友の風狂の一端が窺い知れる。松塘も湖山も、後には大家として名を馳せた詩人だが、このような交遊を通じ、詩情を琢磨しあっていたのである。

ところで、枕山には彼らとは別に、詩の添削を通じた広く浅い人々との関係もあった。弘化元年、枕山は新居に下谷吟社を開いた。「五六年間、都人士来会する者、数十百人を下らず」〔習齋摘草〕序〕であつた。『枕山詩鈔』には、草堂掲題・十笏山房席上と注記する自作の詩も見える。人々は定例の詩会に参加するだけでなく、僧智仙のように、三十年間欠かさず、毎月数度の詩稿添削を依頼したり〔金洞詩鈔〕序〕、川越藩の荒井葉齋らのように、地方からグループで添削を求める場合もあつた〔雁城社闘詩〕〕。

もちろん、こうした詩稿のやりとりは、当時の著名詩人と門人間で一般に行われていたもので、枕山に限ることではない。圈点や評言は単に指導目的にとどまらず、門人らが詩集を刊行する際にそのまま掲載され、箔づけにも利用された。こうした末端の交流が、幕末から明治初年の漢詩文流行を支えていたのである。特に枕山の評は懇切丁寧で知られ、「先生、人の稿を携へて正を乞ふあれば、仔細閲覽して巧拙を問はず。未だ瓦礫として之を厭ひしことあるを見ず。茲を



以て朱硯洞を穿つもの三」(河合仁里著「枕山先生逸事」)などの逸話がある。後年数千人と称された門人の数には、詩稿添削のみで枕山とは実際に面識のない者も含まれていたようである。

最後に余談として、詩友や門人を迎えた枕山の妻の生活を付記しておきたい。最初の妻が安政三年九月に亡くなった時、友人松塘は追悼詩に、「多慚す 緑酒を沽ひて我を留めるを。惜しまず 金釵を抜きて郎に附すを。」「幾番の風月吟盟を接し、毎累の賓厨 手づから羹を作る。」(『房山楼詩』)と、賢妻の饗応ぶりを詠んだ。枕山自作の「金釵換え尽くす 長安の酒。俛許す 夫君の酔って泥に似るを。」(「悼詩」)と合わせて見た時、近世風流人の妻の苦勞と夫を支える意気地を思わずにはいられない。

## 二 枕山の詩風と出版

枕山の詩風に関する先学の研究としては、松下忠氏が枕山の詩句などを詳細に検討し、「詩論は袁宏道・袁枚の性靈説を中心とし、唐詩・宋詩を中心とする折衷説」(『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取』)と結論づけたのが信頼できる。以下、松下氏の考証と重複する部分もあるが、枕山が残した言葉に沿って、若干の考察を加えたい。

〔年譜Ⅰ〕のように、枕山は嘉永二年春の時点で、「余、詩格少変」と自覚している。しかし、同題で詠まれた詩句は、具体的な詩格の変化を示していない。この変化を推測できる記述が、嘉永六年作の松塘の詩に対する評に見える。「余、袁集を読み、詩格一変。彦之、亦、稍稍、袁を喜ぶ。」(『房山楼詩』)。袁は清の詩人で『隨園詩話』の著者袁枚。性情の靈妙な活用を尊び、自由にその才力を發揮することを主眼とし、陳套を嫌い清新を求めた性靈派の詩人である。同書の枕山の序にも、「夫れ詩の大宗と称する者は、其の声の清と其の思の新と在り。声の清は、唐宋後においては、高青邱・查他山たり。思の新は、袁隨園・趙甌北たり」とある。枕山には、袁枚と同じ清の詩人で『甌北詩話』の著者趙翼とを、並べ推奨する記事がしばしば見られる。詩中の「奇」を論じた『湫村詩鈔』の序では、趙翼の集中に「独造の奇」の存するを認め、その源が唐・宋の大家に発するとし、清・宋を遡って中・盛唐の理想的な「正中の奇」を学ぶべきだとす

る論を展開している。このように、袁枚・趙翼を端緒に、最終的に唐の詩人の風趣を修業せんとするのが枕山の持論だったらしい。『清十家絶句』（服部栞山編、嘉永五年刊）や『蘆洲詩鈔』二編（植村蘆洲著、明治十二年刊）の序などにも繰り返されている。

枕山が最も得意とする詩体に、詠物詩と詠史がある。すでに二十三歳の時に『枕山詠物詩』<sup>(注19)</sup>を纏めているが、師五山の影響が大きかった。『蘆洲詠物詩鈔』（植村蘆洲著、明治十二年刊）の枕山の序には、「抑、詠物七律、少陵（杜甫）・香山（白楽天）より肇め、東坡（蘇軾）・誠齋（楊万里）において盛んなり。余、誠齋を以て古今第一とす（中略）明・清に至り、錢虞山・查他山（查慎行）・袁簡齋（袁枚）・趙甌北、諸大家詠物詩を作るを好む。此れ、東坡・誠齋を学ぶ者也（中略）余、少壮五山菊池先生に師事す。詠物を以て、宗とす。故に余、亦、詠物七律二百餘首有り。」とある。同時に書かれた詠物詩の歴史に、袁枚・趙翼の位置も示されている。『梅村詩集』<sup>(注20)</sup>の序にも、「清人の詩、学ぶに足らずと雖も、隨園・甌北の二大家、詠物の詩を作るを好み、誠齋の遺響を遠嗣す」と、同様の記述があり、袁枚や趙翼から時代を遡って学ぶ持論が展開されている。

湖山は、枕山の詠物詩を（年譜Ⅱ）のように評した。若い頃ほど詠物詩を作らなかつたのは、後年の回想（『金洞詠物詩鈔』序）からも確認できる。詠物詩や詠史は、詩作上高度な技巧を要求されるので、枕山自身老嫗を理由に作を厭うこともあった。ところが、晩年になると、再びこれらに積極的な姿勢を見せる。明治十六年『日本詠史百律』、同十八年『歴代詠史百律』の自著の刊行もその一環である。枕山は「頽唐を防がんと欲すれば、詠物詩を作するにしくはなし。其の精細を推し、以て諸體に及び、皆精細を得る」（『金洞詠物詩鈔』序）と、効果を述べる。枕山は明治十年頃から、世の詩の乱れを盛んに口にするが、基礎力を要する詠物詩が、詩作を学ぶ上で有意義な方法と認めたのであろう。だが、人は「枕山は門下に教えるに窮屈で、初学者に古詩の長篇を作らせたり、むずかしい詠物より始める」（『明治漢詩文集』<sup>(注21)</sup>）との印象を持った。漢詩を厳しく追求する枕山と、手頃な娯楽の一つと捉える詩壇の裾野の愛好者との間には、大きなずれが生じていた。

次に、枕山の出版活動について概観する。枕山編著の刊行書は管見の範囲では、

- 天保九年刊 『房山集』著  
同十一年成 『枕山詠物詩』著  
弘化三年刊 『枕山詠物詩』増補版著  
嘉永二年刊 『枕山詩鈔七言絶句』著  
同三年刊 『同人集』編  
同四年刊 『同人集二編』編  
同六年成 『熙々堂叢詩』編  
安政二年刊 『同人集三編』編  
同六年刊 『枕山詩鈔』著  
文久元年刊 『枕山詩鈔二編』著  
慶応元年刊 『観月小稿』編  
同三年刊 『枕山詩鈔三編』著  
明治二年刊 『観蓮小稿』編  
同二年成 『東京詞』著  
同八年刊 『下谷吟社詩』編  
同十一年刊 『江戸名勝詩』著  
同十六年刊 『日本詠史百律』著  
同十八年刊 『歴代詠史百律』著  
同二十六年刊 『枕山先生遺稿』著

である。中でも『枕山詩鈔』は、枕山の動向と風趣を伝える代表作である。この『枕山詩鈔』などの草稿が、『年譜I』慶応大学斯道文庫蔵の枕山自筆詩稿『枕山隨筆』である。私は偶然、東京都福生市郷土資料室森田文庫に、『枕山隨筆』と同じ性格・形式を持った枕山自筆詩稿『己亥年枕山遺稿』が収蔵されているのを知った。同書は、写本一冊。天保十年秋までの詩稿だが、合綴時の錯乱が少なく、刊本の『枕山詩鈔』等と比較するには好資料である。以下、詩稿と刊本を比較し、枕山の著書に対する意識を探ってみる。

ア 初夏、同尾藤希大・横山懷之諸子、遊不忍池分香亭。得韻庚。

千籠樹綠覆涼棚。手揭湘簾上曲瓊。

柳影落波魚食葉。藤花扨岸石垂纓。

招来明月為賓主。喚取閑雲管送迎。

輸與秦淮綠底事。風雨獨欠莫愁名。

※朱にて、不忍池↓小西湖、亭↓亭集、籠↓章、雨↓流と改める。

(他九首省略。『己亥年枕山遺稿』)

イ 小西湖分香亭集。得韻庚。

高亭架岸類涼棚。手揭湘簾上曲瓊。

翠苻匝波波曳帶。紫藤籠石石垂纓。

領来烟水分疆界。約得龜魚管送迎。

輸與秦淮綠底事。風流獨欠莫愁名。

(他一首省略。『枕山詩鈔』)

詩稿の朱の箇所以外にも、刊行に当たって大幅に手を入れている。その結果、成稿は用字に無駄がなく、対句も鮮やか

なものになっている。また詩数も、詩稿十首中二首だけが採られた。これは、詩集全体に言えることで、『己亥年枕山遺稿』収録の五十九題のうち、『枕山詩鈔』に収録されたのは八題、『枕山詩鈔七言絶句』に収録されたのは十九題（一題のみ『己亥年枕山遺稿』にない）である。『枕山詩鈔』と『枕山詩鈔七言絶句』に重複はなく、詩稿の作品の半数以上は未刊のまま終わっている。

以上の点から枕山の刊本は、いずれも豊富な作品群を基礎に、枕山の厳しい眼鏡に叶った佳作であったと推測できる。こうした編集態度は、門人が詩集などを刊行するに際し、校訂や指導を仰いできた時も変わらない。国会図書館蔵の写本『蒼齋小集詩鈔』一冊は、高弟植村蘆洲が蒼齋詩屋で主催した詩会の一年分（年代未詳）の佳作を上梓せんと試みた草稿である。結局未刊に終わったようで、成稿と比較できないが、草稿は張紙・切継が甚だしく、枕山の指示も細字で随所に施されている。「(を)かきき處、彼此あり。刪正すべし。しかし、自然によくできてあれば、平仄はあしきにもかまはぬか」、「三首の内一首御撰み奉願。前詩穩か。後詩巧か」という作品に関する評から、「小子のは会主植村義と認め、号をかくまじきか。会主と斗りではあしからんか」、「この人は十二童なり。なにとか幼名をあらわしたし。たゞ秀童とでもするか如何」という詩集全般に関わる意見まで、忌憚なく書かれている。ここにも、枕山の出版物に対する厳密な態度が見える。

前掲書以外に、枕山が刊行を切望し、『歴代詠詩百律』の巻末に「枕山閒話明治十九年三月嗣出」と広告まで出しながら、ついに果たせなかった書『枕山閒話』がある。同書は門人から集めた詩と枕山の詩話から構成されるものであったらしい。高古香苑書簡によれば、明治十八年二月頃には、「当月者『詩話』を作るべき様、人に勧められ候。若作り候はゞ、尊師之尊作を成丈初に出し候也（詩話を初に置く）。已に六七枚者出来仕候處」と計画が実行に移されていた。刊行予定の十九年三月には、『閒話』も不日に刻しかゝり候。（中略）今時不景氣之節故、少く緩々と仕る可と奉存候。しかし刻はいそぎ候様に仕らなければならずと（何たけ早くと奉存候也）奉存候也」と、上梓直前まで到ったのだが、結局は断念（事情は後述）した。明治二十二年七月には再度編集に意欲を見せ、『閒話』に入候尊作之七古、可相成者、今一首（時事に拘ざるよろしきかと奉存候也。それも愚案か。無御遠慮被仰下度候）御贈り奉願候」とあり、十月には、『閒話』

大分本者出来、諸人之詩も不乏、追々出来仕候」と報じた。だが、この時も出版には及ばず、「翁晩年、詩話を著さんと欲し、果たさず」（『瑞輪吟集』）と噂だけが残った。敬愛する師五山に『五山堂詩話』の名著があり、愛読書に『随園詩話』や『甌北詩話』があることを思うと、枕山が詩話に特別な感情を持ち、出版に執念をみせたのも不思議ではない。

ところで、明治期に入ると、作者にあらかじめ入集料金を請い、後に作品を掲載した本を献呈する漢詩文雑誌や詩集が増えてきた。この方法は、刊本の売行きにかかわらず安定した収益が期待でき、明治初年の詩文雑誌流行に大きく貢献したようである。脇屋清齋編『日本名家詩選』（明治十九年刊）の出吟雛形には、「詩 一行二十字ノ割ニテ、一行九錢トス。板木彫刻、板下序跋ノ入費ヲ計算ス」とあり、枕山も「値は少し高し」（『高古香宛書簡』）と感想を漏らしている。しかし、枕山自身は門人たちの作品を掲載する『枕山閒話』にも、この出版方法を採用しなかった。古香宛枕山書簡にも、「『閒話』者、御刻費に不及候。出来の節三十部御引受被下置候はゞ、其に而大に佳也。」（明治十九年三月）とある。『歴代詠史百律』などの個人詩集同様、印刷費用は借金しても自費で賄い、刊行した本を各地の門人に周旋してもらって借金を返済しようとしたのである。前記の流行の出版方法と比較して効率的ではない。だが、先に作者から金を受け取ってしまったえば、作品に不満があっても編者の発言力は弱くなる。枕山が編著書中の作品に対し、あくまでも自らの意思を反映させたいという思いの表れであったのではなからうか。

（注1） 初山季才著。明治二十八年刊。

（注2） 了善寺蔵の古香宛枕山書簡と大沼家蔵の枕山宛来簡集は、尾形仿監修『漢詩人たちの手紙』（平成六年、ゆまに書房刊）に全文翻刻されている。

（注3） 鷺津毅堂著。嘉永五年跋。

（注4） 石原吾道著。明治十九年刊。

（注5） 枕山の師を星巖とする説もあるが、瑞輪寺蔵『瑞輪吟集』（宮本鴨北著、大正三年刊）に、枕山の孫娘の夫楠莊三郎の書き込

み「枕山は星巖に寄宿せしも門生たらざるを常に語り、養子嗣鶴林・長女嘉年より直話を聴く」がある。管見でも枕山自ら星巖に対し「師」の語を用いた例を知らない。

(注6) 森銑三著「大沼枕山のこと」(『伝記』七巻十号。昭和十五年刊)。

(注7) 松塘の母が明治二年一月十八日に枕山に宛た書簡は、「其御地の騷敷事如何共申上様も無御座、定て御心配多の御事と、かげながら御心配申、日々御噂申暮し居り候処」と、親しい口調で書かれている。

(注8) 鱸松塘著。天保十四年六月題詞。松塘の第一詩集。出版には枕山の協力があつたらしく、五山の序も枕山の依頼による。

(注9) 昌文社刊、溝口桂巖編の漢詩文雑誌。明治十四年刊。

(注10) 湖山の詩は『火後憶得詩』、毅堂の詩は『六名家詩鈔』(植村蘆洲ら編、万延元年刊)に収録。

(注11) 久米習齋著。嘉永六年刊。

(注12) 僧智仙著。明治十二年刊。

(注13) 嵩古香自筆写本。川越藩の人々と詩会を催した初期の頃の詩稿を合綴したもの。

(注14) 『中正日報』に、明治二十四年十月十一日から十一月二十日まで連載。

(注15) 最初の妻の名は不明。秋庭太郎著『永井荷風伝』(昭和五十一年、春陽堂書店刊)に、出自についての詳細な検証がある。

(注16) 鱸松塘著。慶応元年刊。

(注17) 昭和四十四年、明治書院刊。

(注18) 市川湫村著、枕山編。明治七年刊。

(注19) 枕山著。天保十一年刊。中本一冊。弘化三年に増補改版本として『梅癡詠物詩』とともに、大本二冊で刊行された。

(注20) 村田梅村著。明治十二年刊。二編は一六年、三編は二〇年刊。

(注21) 僧智仙著。明治二十四年刊。『枕山詠物詩』刊行時、ある老儒から字句を鏤飾し過ぎる詠物詩の詩体を専らにするのを誡られたが、一笑に付した。たまたま、以後、作る機会がなかったとの逸話を序に紹介する。

(注22) 岡本黄石編。明治文学全集62『明治漢詩文集』(昭和五十八年、筑摩書房刊)。引用は、中村忠行著「略歴」。

(注23) 国会図書館蔵『詠雪詩』は、同書の一部を仮綴した書。

●明治十二年（一八七九）己卯 六二歳

一月 一日 「己卯元日二首」詩作。（『新文詩』四四集）

※『新文詩』は、明治八年創刊の森春濤編の詩文雑誌。新聞紙の名をもじった明治詩文雑誌の嚆矢。同誌は一〇〇集（明治一六年一二月）にまで及び、春濤を東都詩壇随一の地位へと押し上げた。

二日 嵩古香の詩稿を添削。古香の詩を絶妙と評し「尊兄の如きの作り手、得べからず。今より一層御出精あらば、大作者なるべし」と激励。（古香宛書簡）

※古香は、名、俊海。字、啓要。号、翠雨。埼玉県東松山了善寺の住職。枕山門の高弟の一人で、植村蘆洲没後、枕山は自らの詩風の後継者として最も期待をかけていた。詩稿は、安政四年以降の作が収録され、その大部分に枕山自筆の詳細な添削・批点が朱で施されている。以下『古香詩稿』と略記する。

一八日 川島梅坪編『湖海詩伝鈔』刊。枕山の題言収録。

※同書は、二巻二冊。玉蘭泉著『湖海詩伝』の抄録。梅坪は、名、敬孝・浩。字、緝卿。武蔵人。少時、枕山の塾で詩を学び、維新後は埼玉の教育界で活躍。

一三日 嵩古香に添削詩稿・揮毫「蠶」「老将」を送付。「聖老伝燈は尊師」と期待を表明。古香から依頼された妻梅・娘嘉年の潤筆に対し、嘉年は全く教えずそのままの作を、近年家事を専らにして筆を執っていない妻の作は、誤字があり恥ずかしいが送ると記す。（古香宛書簡）

※梅は、枕山が安政四年に迎えた後妻。蔵前の札差太田嘉兵衛の娘。枕山の叔父次郎右衛門と、茶・俳諧で交流のあった縁で、叔父の養女として嫁入りした。嘉年は、文久元年生まれで、翌年刊の『東京十才子詩』・『日本閨媛吟藻』に収録され女流詩人としても知られていた。

一月 『新文詩』四四集成。枕山の詩二首（小野湖山・野口松陽評）、森春濤の詩に対する枕山の評収録。

※湖山の評は、枕山は久しく病気だったが、この詩を読んで回復の兆候が感じられると記す。

二月 五日 嵩古香の詩稿添削。古香の詩に、枕山の詩幅の廣作が出回っていることを嘆く詩あり。古香の詩「書感」に対する評にて、当今の書生は「朝漢暮洋」で、洋学のために人情に薄く、師を師とも思わず「購物の価」のように扱うと批判。ま



た、俗間で牛乳を飲まなければ長生きできないと言われてのに対し、自分は多病だが昨年来頗る強健で、魚介すら好まぬのに、どうして牛や羊を好むだろうかと述べ、ここでも洋教が人心を害すると憤る。〔古香詩稿〕

七日 嵩古香に添削詩稿を送付。家中に病人があったため遅れたと記す。また、勉強のために、詩稿を陸続寄せるように勧めらる。〔古香宛書簡〕

一五日 嵩古香の詩稿添削。〔古香詩稿〕 江幡晚香の書簡受信。『田園襟詩』の序文執筆を依頼される。

※晚香は、名、通寛。字、子厚。秋田藩士。同序の年記は「戊寅（明治二年）之秋」となっているが、『田園襟詩』は、一二年三月出版御届、一月出版なので、年記のみ遡らせたか。あるいは、本書簡を一年と考えることもできる。

一六日 嵩古香に添削詩稿・揮毫「藤肥州」「万花」を送付。〔古香宛書簡〕

二七日 嵩古香、添削詩稿を受領。古香の文明開化を風刺した詩句「文明蟹化」の語を絶賛する。

二月 佐久間鏡洲著・克己編『鏡洲遺稿』刊。枕山の題辞収録。

※同書は、一卷一冊。鏡洲は、名、克典。字、要。東京人。前年八月没。枕山は鏡洲を「極為才人」と評し、親しく交流していた。

三月一〇日頃 小菅香村、旅行先の駿河にて、枕山の病気を気づかう詩を詠む。〔游囊詩存〕卷三

※香村は、名、撥一。字、果卿。東京四谷住。枕山門。『游囊詩存』卷三は、一二月成。官人の香村が休暇を利用して東京近郊の名勝を旅した時の詩を収めた詩集。枕山の評収録。

一四日 松山にコレラ発生。以後、全国に蔓延、各地で騒動が起こり、年末までに死者は十万五千人以上に及んだ。枕山はこの悪疫流行を、夷氛が日本に入ったことと関連づけて批判。〔游囊詩存〕卷三

三月 竹添井井著『棧雲峽雨日記並詩草』刊。枕山の評収録。

※井井は、名、光鴻。字、漸卿。肥後天草人。同書は、三卷三冊。清国公使館員を辞職した編者の北京から上海までの旅中記。

三月 『新文詩』四六集成。小野湖山の詩に対する枕山の評収録。

三月 小菅香村著『游囊詩存』卷一・二の序撰。化政年間以来世に盛行する竹枝と詠詩にはそれぞれ弊害があるが、香村はその両者を好み、しかも雅を知るゆえ弊害を逃れていると讃える。

春 この春は殊に康健を覚え、隅田川に観花すること三度に及ぶと述べる。懸念された枕山の健康が、快方に向かっていることがわかる。(枕山宛書簡・「古香詩稿」)

春 信州佐久の僧智誠、黒沢如意らと図り月次詩会を始め、毎月枕山に正斧を依頼。以後、この嚶々吟社は九年間詩会を続け、枕山も一度も添削を欠かさなかった。(黒沢如意編『嚶々吟社詩』明治二一年刊)

春 岡本黄石の詩に対する評にて、少年の時「万事不如詩最好、一年唯與病相親」を梁川星巖に深賞されたことを回想し、当今の詩人は精思、熟練せずに詩作をするゆえ、多作だが風味がないと批判。(岡本黄石著『黄石齋第五集』明治一八年刊)

春 村田梅村の詩に対する評にて、旧大名の経済的な衰えを「十分一之禄」と記す。(梅村著『梅村詩集二編』明治一六六年刊)

四月 一〇日 『花月新誌』六九号刊。大沼湖雲の詩(成島柳北評)、中村城山の詩に対する枕山の評収録。柳北の評に、枕山は病臥して年を経ているが、息子湖雲の成長を喜んでいと記す。

※『花月新誌』は、明治一〇年創刊の詩文雑誌。柳北の花月社編。

二二日 嵩古香に添削詩稿を送付。(古香宛書簡・「古香詩稿」)

四月 『新文詩』四七集成。小野湖山の詩に対する枕山の評収録。

五月 六日 嵩古香に添削詩稿を送付。書簡に「老夫、頃は大分康健、歩行自由」と健康状態を記す。杉浦琴溪依頼の屏風執筆を報じる。(古香宛書簡・「古香詩稿」)

※琴溪は、名、清助。埼玉県東松山野本村の名主。古香主宰の春桂吟社の人。

七日 小菅香村著『游囊詩存』巻一・二刊。枕山の序収録。

※同書は、二巻一冊。旅中吟を主とする香村の個人詩集。

一二日 山崎北峯編『近代名家詩選』刊。枕山校閲、枕山の詩収録。

※同書は、三巻三冊。嘉永四年刊『江戸名家詩選』の改題再版本。初版本の校閲者は明治一〇年に没した枕山門の関雪江。

二六日 嵩古香に添削詩稿・揮毫「阿累歌」を送付。(古香宛書簡)

二九日 嵩古香の詩稿添削。古香の詩に対する評にて、花時には同伴者を求めず、隅田川畔を独歩するのが杜甫の趣に通じてよ

いと記す。(古香詩稿)

五月 『新文詩』四八集成。小野湖山の詩に対する枕山の評収録。

六月 二七日 嵩古香の詩稿添削。(「古香詩稿」)

二八日 嵩古香の詩稿添削。同詩稿が、西京に遊ぶ平松清石に贈るためのものと聞き添削を急ぐ。(「古香宛書簡」・「古香詩稿」)  
 ※清石は、僧密乗の孫で、古香とは松林松陵門の十年來の同窓。密乗は、平松南園。美濃の人。北品川正徳寺住職で、詩僧として知られ、枕山とも交流。永井荷風著『葦斎漫筆』に詳しい。

七月 八日 嵩古香に書簡。門人の大蔵省役人が出游し、古香を訪問する予定であることを報じる。(「古香宛書簡」)

二四日 『花月新誌』七七号刊。湖雲の詩(末広鐵腸評)収録。

二六日 嵩古香に添削詩稿を送付。(「古香宛書簡」・「古香詩稿」)

八月 一五日 嵩古香に添削詩稿を送付。以前の頼まれ物に、ここ四五日手間取っていたと報じる。(「古香宛書簡」)

二四日 『花月新誌』八〇号刊。中村城山の詩に対する枕山の評収録。

八月 夏に依頼されていた、僧智仙著『金洞詩鈔』の序撰。

※智仙は、井田日爽。字、大愚。号、金洞。根岸芋坂の長善寺住職。

八月 『新文詩』五一集成。枕山の梨本三品親王の古稀を賀す詩(小山春山・森春濤評)、湖雲の詩(春濤評)収録。春濤の評は、枕山の息子湖雲の成長を示す詩を読んで寝られなかったと記す。

九月 一〇日 嵩古香に添削詩稿・揮毫を送付。(「古香宛書簡」)

二六日 嵩古香に書画帳を揮毫して送付。(「古香宛書簡」)

二七日 嵩古香に添削詩稿を送付。古香の詩に対する評にて、「余、老いて愈よ貧。然も野に在るを願う」と記す。今の官吏は位を得ると俄に変心し、軽薄・驕慢・鄙名で佳き者は一人もおらず、下の者には厳しく、上の者には諂う者ばかりだからと述べる。(「古香宛書簡」・「古香詩稿」)

二八日 『花月新誌』八二号刊。小野湖山の詩に対する枕山の評収録。

二九日 旧暦八月一四日。小野湖山と、不忍池の湖亭にて観月。湖山の詩中に、「病起」と枕山の健康状態を詠む。(『新文詩』五四集・小野湖山著『湖山消閑集』)

三〇日 旧暦八月一五日。小野湖山と観月を約束するも、湖山病気のため叶わず。(『湖山消閑集』)

九月 『新文詩』五二集成。枕山の詩「阿累歌」(小野湖山・森春濤評)収録。湖山の評に、同詩が枕山の少年時代の作であると紹介。

秋 嵩古香の詩「秋日、過小西湖」に対する評にて、秋の不忍池の寂しい風情は、春も及ばぬと述べる。(「古香詩稿」)

一〇月二〇日 僧智仙著『金洞詩鈔』刊。枕山の序収録。

※同書は、二卷二冊。智仙の安政二年頃、明治初年の詩を収録。

二四日 旧曆重陽。嵩古香、「奉省熙堂老師」詩作。(詩稿)

※熙堂老師は、枕山のこと。(「古香詩稿」)

二八日 嵩古香、来訪。席上、詩稿添削。古香の詩「四民同権」に対する評にて、当世を「権の世」と批判。(「古香詩稿」)

一〇月 村田梅村著『梅村詩集』刊。枕山の評・頭注を収録。

※同書は、二卷二冊。明治五、一一年作の詩を収録。梅村主宰の水月吟社の詩を付載。梅村は、名、多門・哲。尾張の人。

一二月一六日 『花月新誌』八五号刊。中村城山の詩に対する枕山の評収録。

一七日 小野湖山と、杉浦梅潭・石川桜所に招かれ、夕方より不忍池松源楼にて飲酒。(『湖山消閑集』・『花月新誌』八六号・『新文詩』五五集)。

『新文詩』五五集)。

※梅潭は、名、誠。字、求之。江戸の人。枕山門。晚翠吟社を開き、枕山の指導を仰ぐ。

二七日 嵩古香に添削詩稿・揮毫「菅公」・『金洞詩鈔』を送付。贈られた茶・蕎麦の礼、下谷吟社の詩集や『日本詠史百律』

刊行の意欲などを報じる。(「古香宛書簡」)

※古香からはしばしば蕎麦などの特産物を贈られているが、枕山は古香の詩「蕎麦」に対する評にて、「糝湯一賞、最も妙

味。以て故腸を煖むるに足る……冬夜坐臥、皆其の煖に依る」と、家族で大切に賞味するさまを記している。

三〇日 江崎晚香著『田園襟詩』刊。枕山の序・圈点収録。

※同書は、一卷一冊。「田園四時雜興一百首」を収録。

一二月 伊勢小湊編『聖林唱和』刊。枕山の評収録。

※小湊は、名、華。字、君華。長門藩士。同書は、二卷二冊。小湊が前年一月一日に京の聖護院村に転居したのを記念し、人から贈られた高游外の詩「移居聖林」に対し、諸友から疊十韻を募った書。

一二月 『新文詩』五四集成。枕山の詩（小野湖山評）、小野湖山・中村城山の詩に対する枕山の評収録。

一二月 一日 嵩古香、添削詩稿を受領。古香は、湖雲の詩を示され「典雅流麗」と讃える。古香の詩に対する枕山評に、いまだに馬車に乗ったことがないと述べる。（「古香詩稿」）

八日 嵩古香に添削詩稿・揮毫「咏松」を送付。詩稿紛失を詫びる。また、過日贈られた段物を服に仕立て、近日浅草に参詣するときにおろすと記す。（古香宛書簡・「古香詩稿」）

九日 僧亮順著・川辺雲石編『松靄山房遺稿』刊。枕山の題詞・奥書収録。奥書の撰は一〇月。

※亮順は、名、徳合。字、円禅。伊豆人。はじめ上野寛永寺にあり、のち武蔵常光寺住職。晩年は浅草梅園精舎にあり。同書は、一卷一冊。絶句で名を馳せた亮順の、律詩の遺稿を集めた書。

一五日 嵩古香、添削詩稿を受領。古香の詩に対する評にて、石井南橋とは面識なく、詩も見ていないと報じる。（「古香詩稿」）

※南橋は、筑後久留米の人。後年（一四年）枕山は、南橋を成島柳北と並称し、諧謔を以て詩をなし、しかも風雅を失わぬ詩人と讃える。

一八日 『花月新誌』八五号刊。杉浦梅潭の詩に対する枕山の評収録。

二〇日 小野湖山、『黄石斎第一集』の評に、久しく病んでいた枕山も、近日はほぼ癒えたと記す。

二四日 嵩古香に添削詩稿を送付。枕山はこの詩稿添削の様子について、自分は普段は老懶のため敢えて夜起きることをしないが、此夜は偶然起坐し、灯火の下で案じ、ついに鶏が五更を報じる頃になったと記す。また、古香の詩「呈湖雲賢兄」に対する評にて、息子湖雲は、まだ詩の妨げになるものを退けるほどの境地には及ばないが、詩は好んでいるとし、後には古香の援助を仰ぐことになると述べる。（古香宛書簡・「古香詩稿」）

一二月 新田断常依頼の枕山肖像画（中島杉陰画）完成、送付。（古香宛書簡）

※断常は、法名、光順。信濃の人。所沢薬王寺一八世住職。枕山の「方外之旧友」とある。杉陰は、名、栄之。字、樞香。東京下谷御徒町住。鈴木鷺湖門の画家。

一二月 『新文詩』五五集成。枕山の詩（小野湖山評）収録。

一二月 『新文詩』五六集成。枕山の詩「松」（小野湖山評）収録。湖山は、枕山は少壮の頃は詠物詩を好み、刻されたものだけでも二百余首に上り、奇癖の題も多かったと言う。その後、詩格が大変して「堂々大雅」となったが、たまたま同詩の

ような詠物詩を作ると、やはりその奇境は他の追隨を許さないと評す。

一二月

菊地良編『明治名家詩集』刊。枕山の詩五首収録。

※同書は、二巻二冊。当今の詩人八八人の詞華集。

この年頃

播磨国龍野に詩社淡水吟社が結成される。詩稿添削を枕山に依頼。(今田哲夫著『静軒詩存』昭和三七年)

※龍野は、枕山と交流のあった旧藩主脇坂揖水の薫化を受けて詩が盛んで、詩社には股野達軒・矢野静廬・永富静軒らが参加。揖水は、名、安宅。号、純斎。

### 三 枕山と明治維新

枕山は風雲急を告げる幕末の世をどのように見ていたのであろうか。「年譜I」のように、詩友の宇津木龍臺や湖山までもが、時代の潮流に巻き込まれていった。時流に背を向けたと言われる枕山だが、時には俄か尊皇派を、皮肉をこめ、「世運 時と俱に一新。野人 随分王庭を祝す。」(安政六年作「元日口號」と詠み、時には幕府の軍艦咸臨丸が渡米するのを、憤然として「今春、幕臣、始めて墨夷に赴く。」(万延元年作「元旦」と注し、時には上洛した將軍家茂が無事帰府したのを寿ぎ「駕を税いて今より 庶政を親らす。小儒 私かに擬ふ 昇平を頌へんと。」(文久三年作「六月十六日作」と詠んだ。枕山は進んで時流に身を投ずる人ではなかったが、幕末期に入ってから親しくなった大名や上野東叡山の僧を通して、時代の流れを感じとっていた。例えば慶応元年に始めて拜謁した龍野藩主脇坂安宅には、毎月三回は詩筵に招かれたと言う。安宅の他、枕山と親交のあった津山藩主松平斎民・棚倉藩主松平康爵・津藩主藤堂高猷・宇和島藩主伊達宗紀らは、いずれも漢詩を愛する風流人というだけでなく、藩政改革に尽力するなど、幕末の世に対し一言を持つ大名であった。枕山は風流太守の宴に招かれては、彼らの政談を耳にしていたのである。東叡山の僧では、上野戦争の時彰義隊の精神的よりどころとなった能久親王や主戦論を唱えた僧光映と、文久年間から交流があった。枕山は治安が悪化した上野戦争の前後でさえも、東叡山春性院の住職守道を頻繁に訪れている。これらの交流が影響して形

成された枕山の世相感は、尊皇攘夷の立場を支持しつつ、その推進役を俄か勤皇派ではなく、<sup>(注26)</sup> 將軍を中心とする幕府に期待したとまとめることができると思う。

明治二年刊行の『東京詞』<sup>(注27)</sup>は、こうした世相感の延長にある。同書は、枕山が明治維新直後の東京を詠んだ三十首を折本仕立てにしたもの。各見開き頁は関雪江・市河万庵らの書家が三首ずつ、奥原晴湖・服部波山ら画家が一図ずつ執筆している。詩は天皇の遷都を喜び、新風物に興味を示しながらも、東京に入ってきた新政府の役人の乱行や書生の軽薄な風俗を鋭く風刺している。この風刺は間もなく当局の目に触れ、同書は版木の棄却処分を命ぜられたらしい。友人信夫恕軒は、「輒ち東京詞二十首を賦し、時事を諷詠す。詞意並妙。忽ち弾正臺の糾問する所となる。竟に口を閉じて復言はず」(『恕軒遺稿』)と、枕山の心に残る傷を伝える。しかし、『東京詞』は確かに枕山の代表作として、人々に強い印象を残した。後年、京の橋本蓉塘が上夢香の詩「銀街竹枝」<sup>(注28)</sup>を讃えるのに、「首々、尖新。才藻の美。枕翁の「東京竹枝」に比するも、多く譲らざる也」(明治十五年刊『銀街小誌』)と、殊更『東京詞』を挙げたり、静岡方広寺の住職松久芥舟が枕山宛書簡に、「『東京楽事』廃却の由に候得共、万一御扣の古書も御不用有之候はゞ奉願度」(明治十七年)と書いた例などが、それを物語る。

以後、枕山は時事を詠むことに神経質だったらしく、『枕山閒話』の詩を集めた時も、「時事に拘ざるよろしきか」(前掲嵩古香宛書簡)と述べている。公には口を閉じた枕山だが、もちろん心中の憤りの炎は燃え続け、詩稿添削の折など、評にそれが漏れていた。以下、いくつか拾い出してみよう。

「曾て題牌を掲げて折枝を禁ず。遊人 今日 拗り将て帰る。」(慶応四年作「墨堤即事」)では、愛した隅田川堤の桜から、幕府の瓦解と人心の乱れを嘆いた。明治十四年に上野公園で開催された第二回内国勸業博覧会は、知人の滝和亭らを受賞者だったにもかかわらず、「余、陳人たり。新事を喜ばず。故に、一覽をなさず。且、其の名花、亦俗を被る。是れ亦、観に往かず。」(『古香詩稿』評)という態度だった。枕山には、愛した江戸名所が次々に蹂躪されるように映ったのであろうか。また、古香が用いた「文明蟹化」の語を絶賛し、「年譜Ⅱ」の牛乳や馬車の他に、新曆・新聞・洋服・汽車・洋酒などの新風物を嫌悪し、<sup>(注29)</sup> 高価な初纏を買い、旧曆の節分に豆まきをして隣人から奇妙がられた。

枕山はさらに世相を「権の世」〔年譜Ⅱ〕と述べ、「薄士、禄減り、則ち主を存する能ず。郡民、租重く、則ち竟に騷擾をなす。」〔梅村詩集二編〕枕山評〕とその乱れが政治に由来すると批判する。古香の詩「政談演説会」〔明治十六年作〕の評は、「政談演説は、唯、今日のものに非ざる也。慶応末年、尊王攘夷を称す者、其の実、己の身を謀る在り。憎む可し、憎む可し。然るに其の虚名、今居高に至る。歴々、皆然り。賈の憂人と謂ふべし」〔古香詩稿〕と、新政府の高官の正体を暴露する。この敵愾心は維新の英雄に対しても等しく、大久保利通暗殺事件に対して、「紀尾伊阪、狹隘の地たり。賊、地勢を知る。亦、庸賊に非ず。其の志の成るは、地の利を以て也。」と、西郷隆盛の死に対して、「隆盛、西帰の後、戮死を取る。東下の初め、酷しく暴逆をなす、豈に其の報いに非ざらんや。」〔古香詩稿〕と評す。〔年譜Ⅱ〕にあるように、枕山自身が在野にある理由も、政府官吏の醜悪ゆえであった。

枕山が当今の詩人・書生を批判しているのも〔年譜Ⅱ〕に見る通りである。明治二十一年『古香詩稿』評の、「近来、往來の少年多く眼鏡を懸ける。眼鏡、黠黠。故に方向を誤る。」は、枕山自身が極度の近眼であるだけに、非常に諧謔的な文章である。同評には、「今五六年を過ぎれば、則ち、人心・世態、薄の極みならん。頰の頰ならん」とも記されている。時代が、ますます意に染まぬものになるという予感はあまりに悲しい。

#### 四 漢詩文芸の衰退

枕山は不満の多い明治の時代を、在野にあって生きた。枕山を紹介する時に「旧幕府の逸民」〔恕軒遺稿〕の語が広く用いられている。私は、枕山自らが称した「陳人」の語を挙げて、その生き方の象徴としたい。

余、新聞紙を読まず。固より陳人たり。陳人にして、七旬を過ぐ。是れ故、一生陳人たる也。〔古香詩稿〕評

「陳人」は、古い人間、時世遅れの無用の人の意味である。



では、枕山は当時の人々の目には、どのように映っていたのであろう。枕山が終生髻を切らなかつた話は有名だが、依田学海は明治十一年に枕山と同席した際、「頭髮は髻を存して昔を慕ふ志深しとなり。その娘壺人を携たりしが、これも古風にて儒雅の風ありき」(『学海日録』)と感想を残している。仮名垣魯文著『西洋道中膝栗毛』六編(明治四年成)では、主人公北八が、「いろはにほへとの手ならひはじめは下谷の雪江先生が筆おろし(中略)千字文の文句は大沼枕山におすわるし」と啖呵を切り、「東京子」を誇示している。枕山を東京を代表する市井の漢詩人と捉えていたことを意味しているよう。東京を象徴するイメージは、「地方人の新東京にいずるや必ず枕山翁の詩と奥原女史の画とを携へ帰り、詩を解せざる輩だに両山の比較を口にして茶筵酒席の清話となせし。」(『早稲田文学』第壹号)とも語られる。人々は枕山に江戸文人の姿を懐かしんだのかもしれない。そして、枕山もまた詩や詩評によって、人々の期待するイメージに応えたのである。

大沼家の生活は、ある意味では、こうした世人の敬慕に支えられていたと言っても過言ではない。(年譜Ⅱ)にあるように、枕山は詩稿の添削や揮毫の礼として潤筆金を受領していた。前述のように、枕山の出版物が性格上あまり利益を期待できない以上、これらは貴重な収入源である。添削には門人たちの後援もあったようである。間中雲颿の詩社の月例課題を記した一枚刷「癸未千朶山房月課詩題」(明治十六年分)には、毎月上・下段に二題ずつ詩題が掲げられているが、上段は「大沼枕山夫子批評」とある。「夫子の評を請ふ者は、相当の謝を要出す」の語から推察すると、独立した枕山の門人らは自ら詩社を結び門人を指導するとともに、しばしば大先生の枕山に指導を仰ぐようにしていたらしい。杉浦梅潭が幹事の晚翠吟社や中根半嶺が幹事の不如学吟社は、東京における枕山系の最大結社だが、この会合にも枕山はしばしば招かれている。枕山が在野にあって、詩に励むことができたのも、門人らの好意があったればこそと言うことができるだろう。

揮毫は書画会で行われることもあった。書画会は、著名な詩人・俳人・画家・書家を招き、寺社・酒亭などの会場で人々が揮毫してもらおうというものである。例えば、明治九年五月二十一日に両国中村楼で行われた書画会は、河鍋暁斎画の「書画風景図」に活写されているが、文人や客で賑わう会場に枕山の書も吊るされている。枕山の書の贋作や無許

可の模刻が出回る事件は頻繁に起こったようだが、これも逆に枕山の作の人気を物語る事件である。詩稿の添削と揮毫は最晩年まで続けられ、大沼家を経済的に支えていた。

しかし、文壇の状況は次第に枕山らに厳しい方向へと向かっていた。漢詩文芸の衰退である。明治二十三年に『しがらみ草紙』に発表された市村瓊次郎の評論は、枕山らの漢詩文の文学的完成を高く評価しながらも、日本語で書かれない詩には日本文学としての価値がないという論拠から、「漢詩を能くする者一変すれば、国詩を能くすべきは観やすき理なり」と述べ、「今日大沼、向山の諸老に向て強て国詩を学ばむことを望まずと雖も、森、国分の諸氏に向ては切に之を望まざるを得ず」（『今世の詩人に望む』）と述べる。森槐南と国分青涯は、いずれも、将来を囑望された新鋭の詩人である。知識人の中には、日本語による新しい詩を求める動きがあった。こうした流れは、漢詩人たちも自覚し始めていたように、枕山門の関本三泉著『奇二妙二題画画詩』（明治二十二年刊）の巻末広告には、「漢学は不用なり、漢学は全廃すべしといふ世論あるも、弊舎は更に頓着せず」として、「漢学速成方法口授」と銘打って新しい講習方法を宣伝している。また、枕山が〔年譜Ⅱ〕で嘆くように、作品の出来を厳しく追求しようとする気概と能力に欠ける安易な作者の態度も、漢詩文芸を内側から蝕んでいった。明治十・二十年代は漢詩文雑誌刊行が空前の盛行を見せた時期だが、皮肉にも漢詩文芸自体は崩壊を始めていたのである。

私は、本稿を漢詩文芸の斜陽と一詩人の関わりで結びたいと思う。一詩人とは、枕山の息子湖雲である。荷風は『下谷叢話』を、枕山没後の子孫の動向に触れつつ、「大沼枕山の嫡男大沼湖雲の一家は東京市養育院に收容せられて死亡したのである。而して其遺骨を薬王寺に携来つた孤児の生死については遂に知ることを得ない。」の、鮮烈な一文で結んでいる。私は本稿を執筆するにあたり、大沼千早氏からお話を伺い、御母堂和子氏所蔵の資料を拝見した。その中で一枚の写真が私の目に止まった。写真には「大正十年十一月十三日、一家撮影セリ」の裏書があり、六十一歳の嘉年、娘ひさとその夫楠莊三郎（正瀆）、孫の正名・和子、そして、湖雲の長男義太郎が写っている。千早氏によれば、当時義太郎は楠家に同居しており、次男次郎は奉公に出ていたとのことである。荷風は大正十二年から大沼家を訪ねているが、そこで養育されていた義太郎を知らぬはずはない。つまり、荷風は湖雲とその子供の動向を資料が乏しくて書けなかったの

ではなく、意図的に書かなかったのである。私はこの理由を次の二つに求める。一つは、大沼家と湖雲の子孫への配慮という作家の良心ゆえである。本文には「大沼氏の遺族について新吉の生死を問うたが、多く語ることを好まない様子に見えたので、其の俣わたくしも深く問ふことを憚った。」とある。二つめは、芸術的達成のためである。湖雲とその子孫の消息を、感情を排した客観表現で言い放つことによって、<sup>(注34)</sup>長子流謫の悲劇を主題にした史伝として完結させたのだ。これらは、荷風が敬慕した森鷗外の史伝『渋江抽斎』の「現存の人に言いおよぼすことがようやく多くなるにしたがって、忌諱すべきことに撞着することもまたようやく頻りなることを免れぬ」が、「わたしはよしや多少の困難があるにしても、書かんと欲することだけを書いて、この稿を完うするつもりである」という態度を継承したと言えよう。

「男は故あり家を別て侘て出づ。女可禰後を受け祀を奉ず」(『国会』二百六十四号)など、湖雲廃嫡は枕山の死を報じた新聞・雑誌により、周知のことであった。実際、大沼家では明治二十三年十月に嘉年との間に子をなした門人西川鶴林(名、善次郎)を養子に迎えていた。枕山の葬儀の折の戸主は嘉年だが、二十八年には鶴林が「枕山養子相続人」を名乗る。湖雲が離れた大沼家は、嘉年・鶴林夫婦を中心に漢詩の家を守った。一方、湖雲に関する憶測は「枕山閒話と云ふものを、諸書から抜き出して作った」(今関天彭著「大沼枕山」)などの誤伝さえ生んだ。

湖雲が漢詩雑誌などに見えるようになったのは、『年譜Ⅱ』の明治十二年、十六歳の頃である。詩壇の先輩たちは、枕山の息子としての期待をこめ好意的に迎えている。翌十三年には、浅見綾川編『東京十才子詩』に、嘉年(号、芳樹)・森槐南・橋本蓉塘・岩溪裳川らと十人に数えられている。同年、『花月新誌』九十一号に掲載された次の詩には、

晩春雨中

不堪汲水浸瓶花。 独坐茅齋静不譁。

晚笛隨風遙隔柳。 春潮送雨遠藏沙。

黄鶯烟際求芳樹。 紫燕泥辺帶落花。

成島柳北の評「小史の詩才、日に鋭進するを見る。枕翁の喜び知るべき也」が施されている。私の個人的な感想だが、湖雲の詩は枕山によく似ているように思える。枕山もまた、「年譜Ⅱ」のように詩を好む我が子湖雲の性情に大いに期待をかけ、将来詩人として一人立ちする時には、最も信賴できる門人嵩古香に援助が得られるようにと述べている。

湖雲をめぐる事件は、明治十九年に起こった。依田学海は五月七日の日記に、「この日聞く、大沼枕山翁一子放蕩にして負債三百余金あり。利子貴ければ日々その苦をまぬがれず、門人等謀りてこれを救はむとすといふ。梅潭これが為に周旋するよし也」と記す。杉浦梅潭らが枕山のために尽力したとすれば、門人以外にも湖雲の悪評は広まったに違いない。信夫恕軒の「大沼枕山伝」も、「嗣子遊蕩。家道頓に衰ふ」と書き残している。

しかし、私は書簡や詩稿で枕山に近づくにつれ、「放蕩」「遊蕩」なる言葉の、傍觀者的で野次馬的な表現に疑問を抱くようになった。ところで、明治十九年は、ちょうど『枕山閒話』が刊行直前に立ち消えになった時期である。当時の大沼家の家計を、古香宛書簡では、「『歴代詠史』も或處に而、三十金借り候。今月十一日に餘さず返金仕候也。僅に三十金なれど、私事昨年隣地を三百十金に而買取候故、何分此債未罷了也。故に無金也。『閒話』も不日に刻しかゝり候也。外に金をかり候處も無に非也。」(三月十六日付)と漏らしている。地代三百円余り……、枕山はその上に息子の放蕩の借金を背負いこんだのか、あるいは古香への手紙が息子をかばった言葉なのかはわからない。しかし、これによって、枕山が切望した『枕山閒話』出版を断念せざるをえなくなったことは確実である。しかし、それでも枕山は湖雲をあきらめてはいなかった。明治二十一年十一月二十二日、湖雲は古香が住職を勤める東松山の了善寺を訪問する。古香は無理に湖雲を宿泊させ、詩四首を以て湖雲を諫めた。「要めず 樽前 酒豪を競うを。須ひず 燈下 詩毫を闘わすを。君の為に洗はんと欲す 繁華の夢。閑夜 松声 枕上の濤。」は、繁華の夢を見る湖雲への戒めであり、「百年 吾且に凄寥を慮らんとす。下谷の一燈 誰か手を挑げんや。其の任 君に属す 君勉力せよ。翁を奉じて 遺體 筆超々。」は、枕山の詩を継承できるのは湖雲以外にないという激励である。古香は我が子の立ち直りを願う枕山の気持ちを代弁した

のであろう。この詩稿に加えた枕山評は「警の一字、千金となす也」、「文運の寂寥、亦、天運然たり。然るに、宜しく教えを奉ずべし」と短い。

「放蕩」の理由が何であったのか。私も荷風が敢えて触れなかった諸般の事情に、触れようとは思わない。だが、湖雲をもう一度文壇の時流の中に置いて、もっと湖雲に近い視点から検証してみたいと思う。時代は漢詩文芸を置き去りに始めていた。大沼家という漢詩人の家に育った湖雲は、それを最も敏感に察知していたのではなからうか。湖雲を「繁華の夢」に走らせたのは、漢詩文学の衰退という不安ではなかったか。

僕、湖雲と来往するに、虚口無し。其の詩を談ずるを聞くに、頗る乃翁先生の風真有り。畏友也。『新文詩』六十一集)

これは、明治十三年に森槐南が湖雲の詩に対して添えた評である。槐南は、森春濤の子で湖雲より一歳年長であった。この言葉の裏には、ともに江戸詩壇を代表する父を持ち、自らも詩を志す湖雲に対する関心と対抗心が見える。だが、湖雲にとって槐南は同じ境涯の者ではなかったかもしれない。なぜなら、父枕山と槐南の父春濤とは、詩人としての生き方が違っており、それが子の将来にも微妙に影を投じていたからである。少年時代、鷺津益斎の塾で、「捨吉落水、浩甫漂書」(佐藤寛著『春濤先生逸事談』。明治二十二年成)と詩才を並称された二人は、ともに明治初年の東京でも漢詩の大家として仰がれていた。しかし、枕山が維新の世相や政治を嫌悪し、意識的にそれらとの交流を排してきたのに対し、春濤は漢詩文雑誌『新文詩』刊行など、時流に沿った新方式を導入して詩壇における勢力を拡大していた。新政府の高官や官吏とも積極的に交流した春濤の『新文詩』には、彼らの作品が多く入集する。この点は、すでに前田愛氏(註36)が論考「枕山と春濤——明治初年の漢詩壇——」で詳細に考察されているので繰り返さないが、枕山自身がどのように春濤を見ていたかだけ記しておこう。枕山は詩の客として政府高官を迎える『新文詩』を内心嫌っていたようで、「余、ただ新文詩巻に入るを厭ふ」(『古香詩稿』評。明治十一年)と漏らしている。枕山が、新政府高官に迎合する世の詩人た

ちを、激しく嫌悪したのは、古香の添削詩稿の一つから知ることができる。明治十四年成の『古香詩稿』巻末に綴じ込まれたこの詩稿は、珍しく厳しい語調で枕山が評を記している。詩稿は西郷隆盛・木戸孝允・島津久光を題にした詠詩である。いずれも維新に勲功があり、新政府の高官（この時点では、役を退いているが久光は存命）になった人である。枕山はこれらの評に、「官人ばかりが先哲で、隠者が先哲でなきや。小子にはちと、わかりかぬる」、「右四首のような御作は、小子拝覧仕りかね、御問・御みせ候てもむだ。こんな詩はこんな事をよくしている、当世浮行の有名先生に託すべし。小子の如き隠士は一向存ぜず。ゆえ筆を下しがたし」と記す。新政府の高官や官吏におもねり、誇りを失った漢詩人に対する悲憤が感じられよう。野に在るとするのは、官職に就かぬというだけでなく、いかなる権勢にも屈しないことである。枕山が旧幕府の士族、自由民権運動の指導者、市井にあって地域の青少年を教育した知識人たちから支持されたのは、こうした反骨精神があったからであろう。人々が愛したのは、貧と老に苦しみながらも、頑なに浮薄な新時代を拒む枕山像であった。

しかし、この枕山の生き方が、息子湖雲を苦しめた。大沼家の生活は、実質的に枕山の象徴性に依存する詩稿添削と揮毫に支えられていたのである。湖雲がたとえ自らの才を信じて、父の後継者になったとしても、同じ方法で世を渡ることとは困難だと思ったのではなからうか。「陳人」という父の象徴性に集う世人が、若い湖雲の所を今までどおり訪れるとは考えられない。また、春濤の息子槐南のような出世（すでに明治十四年に太政官出仕。以後、能吏として三條実美・伊藤博文らに愛された）は、清貧・反骨の人を好んだ父の門人の後押しでは望めない。まして、江戸の世は日々遠のき、生きる糧と頼む漢詩文芸は斜陽を迎えつつあった。漢詩文芸の衰えに漢詩人たちが気付き始めていたことはすでに述べたが、多くの場合は、結社や出版の方法という小手先の対応がもたらす表面的な隆盛に満足していたように思う。しかし、常に当世の詩の質の低下を嘆く枕山のそばにあった湖雲には、それがはっきりと予測できたに違いない。私は湖雲に、時代を先に見てしまった者の悲哀を感じずにはいられないのである。荷風が枕山にひかれたのは、「官権が嫌ひで、つむじの曲った（中略）東京っ子」（笹川臨風著『明治還魂紙』。昭和二十一年刊）の一人に数えられる荷風自身の生き方と相通じていたからであろうが、同時に湖雲の悲劇をも自らに重ねていたのかもしれない。

病氣と詩壇における影響力の弱まりから、枕山の晩年を不遇とする評伝は多い。だが、「病後、詩思湧き出づ。夜臥するも睡りに付き難く、頻々作り候」（明治十八年、嵩古香宛書簡）や「私も夜中睡らず、大分詩を作り候」（同二十三年）の言葉は、晩年になっても枕山の漢詩に対する情熱が全く衰えていなかったことを示している。私は自ら「陳人」たることを宣言し、最期まで愛する漢詩に専心することのできた枕山の生涯を幸福なものだったと考えるのである。

末筆になりましたが、貴重な資料の閲覧と助言を賜った、了善寺住職嵩海雄様、大沼和子・千早様、福生市郷土資料室に心よりお礼を申し上げます。

〔注24〕 森鷗外著『能久親王事蹟』（明治四十一年刊）に詳しい。

〔注25〕 玉林晴朗著「大沼枕山と春性院守道」（『伝記』昭和十三年七月号）は、守道の『公私日記』に記録された、四月から八月にかけての六度の枕山来訪を紹介している。

〔注26〕 枕山は將軍勲員で、家康を祭る上野東照宮には毎月十七日に必ず参詣し、病氣の時でも娘嘉年に代参させていたという（「枕山先生逸事」）。また、將軍徳川慶喜のため勝海舟を訪問し時事を論じ、後に慶喜より葵の紋の外套を賜り感涙したとの逸話が伝わる。（信夫恕軒著『恕軒遺稿』大正七年刊）。

〔注27〕 『東京詞』の作品は、佐藤要人著『太平文庫9 東京詞』（昭和五十六年、太平書屋刊）と日野龍夫著『江戸詩人選集10 成島柳北大沼枕山』（平成二年、岩波書店刊）に詳しく読解されている。

〔注28〕 関讓之著、原田擣三編。明治十五年刊。上夢香の詩「銀街竹枝」は、同書巻末に付載されている。

〔注29〕 ただし、枕山は全く新風物を拒絶したのではない。明治十年刊『海外詠史百絶』（河口寛著）を、題材の常套化という詠史の欠点を補うと讃え、評でワットらの事蹟に言及する。また、例えば人力車を初め敬遠していたが、十六年には「人力車を以て、穩やかとす」（『古香詩稿』）と認めている。

〔注30〕 東京専門学校編。明治二十四年十月刊。「詩文評論」より。奥原女史は、画家奥原晴湖。両山は、枕山と湖山。

〔注31〕 暁斎研究会会誌編集委員編『暁斎』第四号。昭和五十六年刊。

(注32) 新声社編『しがらみ草紙』第六号。明治二十三年三月刊。なお、清水瓊次郎は、前号「明代の文学と明治の文学」でも同趣旨の論を展開している。

(注33) 当時、荘三郎は三十八歳。荷風が枕山のことを大沼家に問い合わせる時の書簡は荘三郎宛であった。和子氏は八歳。

(注34) 竹盛天雄著『下谷叢話』縁起——初出から改作へのすじみち——(『文学』昭和四十年九月号)。氏は『下谷叢話』を、「伝記作者荷風みずからが、長子流謫の悲運にあった。(中略)新吉一族の悲劇的結末の生み出す凄絶さは、破滅型の荷風にのみふさわしい史伝」と読み解く。

(注35) 鶴林は、文久三年、大坂に生まれ、藤沢南岳らに学び、明治十六年に枕山に入門。嘉年との間には、十八年生まれのみさと二十三年生まれの甲の二人の娘がいる。

(注36) 『幕末・維新期の文学』。昭和四十七年、法政大学出版局刊。